

土木学会 創立100周年記念事業の紹介

片山 功三

KATAYAMA Kozo
(公社)土木学会
100周年事業推進室長



土木学会の創立

2014年11月24日、(公社)土木学会は創立100周年を迎えた。本会の前身は、1879年11月18日に工部大学校第1回卒業生23名（うち土木科3名）により親睦と情報交換による工学発展を目指して創立された「工学会」（現日本工学会）である。工学会の設立から数えると135年になる。工学会からは造家学会（後の日本建築学会）や電気学会、機械学会などが設立後20年足らずの間に次々と分離・独立を果たした。土木学会の独立が遅れた理由は、初代会長に選出された古市公威が極端な専門分業に反対し土木工学の総合性と土木技術者の自覚を強く訴えたためである。しかし、独立の気運も高まり、1914年に独立した。

100周年記念事業実施への歩み

土木学会では、7年前に記念事業準備タスクフォースを立ち上げ、検討を始めた。翌2008年度には、記念事業準備委員会を設置し、100周年に向けて早急に着手すべき事項や100周年記念事業の内容、その実施のための委員会組織などを検討した。その後、議論を深め、2010年度には、記念事業実行委員会の設置を諮り、同年6月に100周年記念ロゴを決定した。

議論が進むなかで2011年3月に未曾有の東日本大震災が発生し、土木界や土木技術者に大きな課題をもたらすことになった。記念事業のコンセプトについても再考を余儀なくされた。そこで、100周年戦略会議を設置し、100周年を一つの節目として土木の原点に回帰し、これからの土木の将来のあり方を見つめ直すことにした。多くの会員に100周年事業に参加してもらうため、支部・委員会に対し事業案や意見の公募を行い、支部の直接訪問による意見交換、既存の支部・委員会活動の洗い出しなどを行った。戦略会議は、①全

国の支部を巻き込んで「草の根」的に100周年事業を展開すること、②お祭りのな行事ではなく持続性のある行事とすることの二点を重要視した。そして、2012年9月に実行委員会を設置した。

100周年記念事業の概要

準備タスクフォースの立ち上げから丸七年。そして、実行委員会設置から丸二年が経過した。「豊かなくらしの礎をこれまでも、これからも」のキャッチフレーズのもと、本部・支部が連携して、「社会安全」「社会貢献」「市民交流」「国際貢献」を基本として30もの100周年記念事業を実施している。以下、本稿では、100周年記念事業の概要を紹介する。

1. 社会安全

1-1 安全な国土への再設計

各支部では、東日本大震災の発災後に「安全な国土への再設計」タスクフォースを設置し、各地域で発生が想定される災害（地震、台風、土砂崩れなど）の事例調査・整理、リスクの評価、被害軽減策の検討などを進めている。これに関連し、各支部が自治体や市民などと一体となり、災害や防災に関する講演会、討論会などを開催した。

1-2 津波・高潮の防災支援

日本の要保全海岸の約3分の1は保全施設が未整備であり、津波や高潮の防災には、市民が現状を理解し、避難や減災の態勢を整えることが重要である。そこで、海岸工学委員会が中心となり、モデル地区にボランティアを派遣、地元の方々と協働し、ハザードマップなどの防災情報を現地・現場で認知できる仕組みの構築などを進めている。

1-3 巨大災害を想定した工学連携ネットワーク構築

首都直下地震などの巨大災害が想定されているなか、安全・安心な社会をつくるため、東日本大震災を機に、土木、建築、機械、電気、情報処理、計測自動制御の各学会ならびに日本工学会が連携し、相互理解と連携体制づくりを進めている。

1-4 安全・安心・安定な社会づくりに向けた地域継続計画（DCP）普及

企業における事業継続計画（BCP）は、行政、地域、学校、病院、家庭などの各組織が継続し、最適な形で地域再生を果たすための地域継続計画（DCP）の一部に位置づけられる。子どもを含む住民が自分を取り巻く家庭・学校・地域などの大切さを認識し、その中で自分が何をなすべきかの自覚を身につけられるよう、リーフレットなどの学習資料の作成に取り組んでいる。

2. 社会貢献

2-1 将来ビジョンの策定

「社会と土木の100年ビジョン—あらゆる境界をひらき、持続可能な社会の礎を築く—」（以下、将来ビジョン）は、持続可能な社会の礎を築く土木の姿、その目標に到達するための土木学会の行動を示すもので、そのメッセージは、「土木学会創立100周年宣言」として、100周年記念式典にて磯部雅彦会長から発出された。



写真-1 社会と土木の100年ビジョン

将来ビジョンの策定は、特別委員会傘下の「若手技術者ワーキング」「100周年記念討論会（全国大会時に実施）」支部主催の「若手土木技術者の交流サロン」とともに並行して進められた、土木学会全体で取り組んだ事業である（写真-1）。

2-2 未来のT&I コンテスト

土木は多くの文明を創造し、より良い社会の実現に取り組んできた。その土木に必要なT（テクノロジー）とI（アイデア）を募る「未来のT&Iコンテスト」を実施した。

T部門は、未来を創造する土木の企画力・実行力・総合力すべてを兼ね備えた土木の迫力を社会に問うことを目的に、「自分たちが実現したい未来の社会」のアイデアとそれを実現するための技術的検討を伴う企画提案を対象とした。

I部門では、「自分たちが住みたい未来の社会」の夢のアイデアについて小学生を中心とした一般市民から広く募集した。選ばれた5作品の提案者を未来プランナーとして迎え、土木エンジニアによる検討チーム（協力：（一社）日本建設業連合会）と一緒に、その実現に向けた技術的検討を行った。

このコンテストでは、I部門209件、T部門47件の応募作品から準備委員会による一次選考で各部門から5件ずつを選定し、10月に日本科学未来館で開催した最終選考会（選考委員長：毛利衛・日本科学未来館館長）において、両部門とも最優秀賞1件、優秀賞4件を選定した。なお、表彰は100周年記念式典で行った。

2-3 若手土木技術者の交流サロン

将来ビジョン策定の参考とするため、支部の協力を得て、多様な組織に所属する若手土木技術者の交流会を開催し意見などを聴取した。将来ビジョン策定後は、ビジョンや記念式典で発表された「土木学会創立100周年宣言」を共有するための交流会を各支部で開催する予定である。

2-4 100周年記念討論会

2010年度から9月の全国大会の折に100周年記念討論会を実施してきた。2014年度はその集大成として「土木界・土木学会の目指す社会と今後の活動」と題する討論会を大阪大学で開催した。

2-5 「新しい公共」の担い手となる建設系NPOを支援する「中間支援組織」の設立

新しい時代における土木領域の拡がりを念頭に、「新しい公共」の担い手となる建設系NPOの活動の場づくりと育成、技術の向上を目指している。その成果である「特定非営利活動法人シビルNPO連携プラットフォーム（CNCP）」（代表理事：山本卓朗元会長）が2014年4月に発足した。

3. 市民交流

3-1 市民普請大賞

近年、かつての普請を彷彿とさせるような公共施設の維持管理などに関する市民活動が全国各地で報告、報道されている。本会では、「市民が主導的な役割を果たしながら、地域を豊かにするために実践する公共のための取組」を“市民普請”とし、このような活動を賞揚するため、「市民普請大賞」を創設した（写真-2）。



写真-2 市民普請大賞のポスター

河川、道路、都市、観光、防災計画などさまざまな分野から78件の応募があり、予備選考にて33件を選定し、8月に行われた第一次選考会を経て、優秀賞5件を選定した。

さらに10月の最終選考会（未来のT&Iコンテストと同時開催）において、優秀賞5件の中からグランプリ1件、準グランプリ2件を決定した。

3-2 土木ツアー

土木への理解を深めてもらうため、外部企業が企画する、普段は非公開の土木構造物や現場の旬の姿を見学するツアーやNHK文化センターなどが実施する講座に協力している。

3-3 土木の日

2014年度は、「土木の日」「暮らしと土木の週間」（11月18日～24日）に毎年各地で開催される行事も100周年と連動して実施し、その集大成として9月20日～10月31日（東京駅・行幸地下ギャラリー）、11月19日～22日（新宿駅・新宿西口イベントコーナー）にて「土木コレクションHANDS+EYES」の展示を実施した。

3-4 土木コレクション・土木ふれあいフェスタ・どぼくカフェ

近代日本を築いてきた構造物の手書きの図面など、土木界が所有する貴重な資料を「土木コレクション（ドボコレ）」と銘打って一般公開している。2008年に「土木の日」本部事業として始まり、2009年からは全国大会と連動し開催支部のコレクションを収集して展示してきた。2014年度は100周年記念事業として、全支部のコレクションを揃え、巡回展示を実施した。

「土木ふれあいフェスタ」は、土木の実験や体験を通じて市民（特に親子）と土木技術者の交流を図るもので、2009年から開催している（写真-3）。「どぼくカフェ」は、土木を文化と捉え、市民やマニアと呼ばれる皆さんと土木技術者がさまざまなテーマで語らうもので、2010年から開催している。



写真-3 土木ふれあいフェスタ（ららぽーと柏の葉会場）

4. 国際貢献

土木学会の国際化推進も視野に入れ、海外への情報発信や国際ネットワークの強化につながる活動を実施している。100周年ウィーク（11月18日～24日）に開催した国際シンポジウムやテクニカルツアーもその一環である。

4-1 英文論文集

海外への情報発信として、論文集編集委員会が英文論文集 Journal of JSCE をJ-STAGE（(独)科学技術振興機構（JST）が運営する総合学術電子ジャーナルサイト）上に創刊した。第1号として2013年1月に「東日本大震災特集号」を発刊した。

4-2 第6回アジア土木技術国際会議（6th CECAR）における活動

2013年8月にインドネシアで開催された6th CECARにおいて、「津波セッション」と2012年から継続している「防災に関する国際円卓会議」を開催した。また、日本の土木技術や100周年記念事業を紹介するブース展示を実施した。

4-3 国際若手技術者ワークショップ

2014年9月の全国大会において、35歳以下の若手技術者（海外学協会からの推薦者、国内留学生、日本人学生ほか）を対象に“Facing the Challenges of Our Future Society”をテーマに国際ワークショップを開催した。

4-4 社会インフラ（道路施設）の維持管理に関する国際集会

構造工学委員会が中心となり2014年11月に、社会インフラのサステナビリティとレジリエンスを向上させることを目的に土木学会講堂にて開催した。

4-5 情報発信と国際ネットワーク強化のための電子情報システム事業

日本で土木工学を学ぶ留学生および日本で学んだ卒業生を対象に、持続性のある人的ネットワークの構築に取り組んでおり、英語版HPでは、“Student Voice”や“News Letter”の配信などを行っている。

4-6 日韓台ジョイントセミナー

2014年8月に、西部支部と大韓土木学会釜山支部との既往の連携を踏まえ、台湾も参加して、釜山にて「社会環境の持続可能性」をテーマに日韓台ジョイントセミナーを開催した。

4-7 インフラ国際協力・国際貢献アーカイブス

政府開発援助などを通じて実施されてきた多くのインフラ整備プロジェクトから事例を選定し、アーカイブスとして記録、保存する事業である。第一弾としてコンゴ民主共和国に日本の技術協力・円借款で建設された「マタディ橋建設プロジェクト」を取りまとめた。

5. 記念出版

創立100周年記念出版として表-1に示す出版物を刊行した（記念出版承認順、写真-4参照）。



土木学会の100年



土木コレクションHANDS + EYES



日本が世界に誇るコンクリート技術

写真-4 100周年記念出版の例

表－1 100周年記念出版物一覧（※2014年11月時点で未刊行）

No.	書名	担当委員会
①	継続は力なり ―女性土木技術者のためのキャリアガイド―	教育企画・人材育成委員会
②	東日本大震災 ～3.11あの日を忘れないでほしい～	土木学会誌編集委員会
③	※日本土木史1991-2010	日本土木史編集特別委員会
④	土木学会の100年	「土木学会の100年」編集特別委員会
⑤	技術者の自立・技術の独立を求めて ―直木倫太郎と宮本武之輔の歩みを中心に	土木図書館委員会
⑥	土木コレクションHANDS + EYES	土木の日実行委員会
⑦	行動する技術者たち ～地域に貢献する土木の知恵の再認識～	教育企画・人材育成委員会
⑧	インフラ・まちづくりと新しい公共	教育企画・人材育成委員会
⑨	100年橋梁 A Hundred Year Old Bridges ～100年を生き続けた橋の歴史と物語～	鋼構造委員会
⑩	フロンティアに挑む技術 ～北海道の土木遺産～	北海道支部
⑪	土木映画の100年（発行：言視舎）	土木技術映像委員会
⑫	日本が世界に誇るコンクリート技術（日英対訳）	コンクリート委員会
⑬	※土木学会 未来のT & I作品集	土木学会創立100周年事業実行委員会
⑭	社会と土木の100年ビジョン ―あらゆる境界をひらき、持続可能な社会の礎を築く―	土木学会将来ビジョン策定特別委員会
⑮	※なぜ「土木学会誌」の創刊号に東京駅の建築工事報告が載ったのか？ ―金井彦三郎とその時代―（発行：交通新聞社）	土木史研究委員会
⑯	土木技術者の気概 ―廣井勇とその弟子たち―（発行：鹿島出版会）	高橋裕：著（編集協力：土木学会廣井勇研究会）
⑰	解体新書 大河津分水可動堰	コンクリート委員会
⑱	東海道新幹線と首都高：1964東京オリンピックに始まる50年の軌跡 ～その意図、成果、そして未来に向けた新たな飛躍～	50 + 50 シンポジウム実行委員会

6. 広報

6-1 100周年事業特設ホームページの開設・運営

100周年事業に係る特設ポータルサイト（<http://jsce100.com>）を構築・運営し、土木学会設立の精神、100年の歴史など、これまでの土木学会の歩みに関する資料や、全国各地で展開される記念事業の告知やレポートなどを掲載している。

6-2 スペシャルサイト「初代土木学会会長古市公威が語る『土木学会の精神』」

100年前に古市公威初代会長により語られた「本会の会員は技師である。技手ではない。将校である。兵卒ではない。」に示された「土木学会の精神」を就任演説や足跡から解釈するスペシャルサイトを制作している（写真－5）。

6-3 日刊建設専門三紙との連携企画 土木専門番組「土木チャンネル」

インターネット番組サイト「土木チャンネル」を日刊建設専門三紙（日刊建設工業新聞社、日刊建設産業



写真－5 古市公威が語る「土木学会の精神」サイト

新聞社、日刊建設通信新聞社）と連携して立ち上げている（<http://doboku-ch.jp/>）。各界の著名人をお招きして対談する「築土構木の思想」や、土木について自由に語っていただく「土木を語る」などを毎週月曜日に配信しており、2013年6月の配信開始以降、20名を超える方々に登壇いただいております。土木関係者のみならず広く一般の方々からも多く視聴されている。

6-4 記念グッズの作成・配布

100周年記念事業を盛り上げていくため、記念グッズ(ピンバッジ、オリジナルクリアファイル)を作成し、土木学会誌2013年9月号に同封して会員に配布した。

2014年9月1日には、日本郵便(株)から特殊切手「土木学会創立100周年」が発行された。この記念切手の風景画の中には30種類以上の土木の仕事が描かれている(写真-6)。

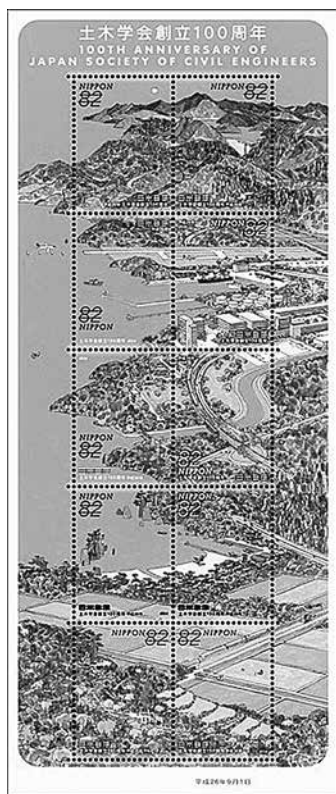


写真-6 土木学会創立100周年記念切手(平成26年9月1日発行)

100周年ウィーク行事

(1) 記念式典および記念祝賀会

土木学会は、先述したように「社会安全」「社会貢献」「市民交流」「国際貢献」を基本として100周年記念事業を展開してきた。

その記念事業のハイライトとして、100周年ウィークにおいて、記念式典・記念祝賀会、記念国際シンポジウムが行われた。

記念式典は、11月21日(金)に東京国際フォーラムにおいて、皇太子殿下に御臨席いただき、国内外から約1,300名(うち、海外ゲストは21の学協会から約90名)の参加を得て挙行された。第一部では、皇太

子殿下からお言葉を賜った。殿下には、第二部の磯部雅彦会長による「土木学会創立100周年宣言」も御聴取いただき、その後、「土木と文明」と題する特別展示や、市民普請大賞および未来のT&Iコンテストの受賞作品を御覧いただいた。

記念式典の特別講演では、山崎正和氏(劇作家、大阪大学名誉教授)に「日本人の新しい人生設計」と題してご講演いただいた。

同夜、記念祝賀会が帝国ホテル 孔雀の間において盛大に開催された。

(2) 国際シンポジウム

「防災に関する国際円卓会議」を19日に土木学会講堂で開催した。同会議は、各国代表の土木技術者が集い、防災に関するさまざまな議論を深める場として、初回を2012年に名古屋で、第2回を2013年にインドネシアのジャカルタで開催した。

「国際フォーラム“社会インフラの豊かな生活への貢献”」を20日に東京駅近くのJPタワーホール&カンファレンスにて開催した。この100年の間に土木工学が果たしてきた役割と成果を振り返るとともに、豊かな社会を実現するために今後、土木工学が果たすべき役割や将来の国際協力のあり方を討議した。

テクニカルツアーについては、22日に「東北震災復興ツアー」(陸前高田市、釜石市を訪問)と「青山士と荒川放水路ツアー」(船上視察含む)の2コースを実施した。

おわりに

100周年事業の枠組みの中で、特に重要な事業を「100周年記念事業」と位置づけ、社会の安全確保を図る「社会安全」、安全に支えられた豊かな環境と暮らし・活力のある社会を実現する「社会貢献」、土木に関する国民との対話の促進を図る「市民交流」、アジアを中心として世界のインフラ整備に貢献する土木界を目指した「国際貢献」の四つを基本に多種多様な記念事業を展開してきた。こうした活動は継続性が求められるが、土木学会単独では限界があることも事実である。日本非開削技術協会を始めとする土木界に属する学協会が挙ってそれぞれの技術領域を超えて連携し、持続可能な社会の礎を築くため邁進されることを願いたい。